

デンマーク語とドイツ語の状態受動完了形

甲斐崎 由典

はじめに

デンマーク語とドイツ語には、助動詞 *blive*・*werden* と過去分詞で作る通常の受動形の他に、受けた動作の完了後に結果として残る状態の方に重点を置く、助動詞 *være*・*sein* と過去分詞で作る状態受動形がある。

そこで仮に、この状態受動形の現在完了形や過去完了形というものを想定してみると、完了形自体も、受動の意味合いはないが同じように動作完了後の状態に重点を置く形式なので、結局受けた動作の「完了後の状態の完了後の状態」となってしまう、状態受動形の完了形という構文は無用な過剰形式と予想される。

ところが現実には、デンマーク語でもドイツ語でも状態受動形の完了形は使われることがあり、さらにデンマーク語では、ごく稀にしか使われないドイツ語に比べ、通常の言語使用でも無視できないほどの頻度で出現する。

そこで本研究では、この状態受動完了形という一見不可解な形式の構文意味を探りながら、さらにデンマーク語とドイツ語での利用頻度の違いの謎を解明してみたい。

1. ドイツ語の状態受動形¹の研究

1.1 状態受動形全般

¹ 本稿では純粹に形式だけを見て、*blive*・*werden* と過去分詞が組み合わせられていれば動作受動形、*være*・*sein* と過去分詞が組み合わせられていれば状態受動形と呼ぶことにする。

1952年にHans Glinzが能動形・動作受動形・状態受動形という3区分を打ち出して以来、状態受動形は、単に(動作)受動形の完了形のwordenを省いただけの構文ではなくなり、ドイツ語の態を構成する独立した一表現形式として詳細な分析がなされるようになった(Brinker: 12-15, 70)。

能動形や動作受動形との相対比較ではなく、状態受動形を単独で詳しく分析してきた研究者のひとりとしてGerhard Helbigがいるが、Helbigは、一見同じように見える状態受動形を、能動形に言い換えた場合などを参考にして細かく分類する必要性を早くから指摘した。それに従い現在では、(見かけ上の)状態受動形を少なくとも次の3種に分類することが多い(次はHelbig 1983a, 1983b, 1987, Helbig / Buscha: 175-181を元に筆者がまとめた)²。

a. 動作を受けた後の状態を表す形式 (Zustandspassiv)

1. Der Brief ist geschrieben.

X hat den Brief geschrieben. (Der Brief ist geschrieben worden.)

b. 再帰的動作の後の状態を表す形式 (Zustandsreflexiv)³

2. Das Mädchen ist erholt.

Das Mädchen hat sich erholt.

c. 単に状態を表す形式 (allgemeine Zustandsform)

3. Amerika ist von Europa durch den Atlantik getrennt.

Der Atlantik trennt Amerika von Europa.

(*Amerika ist von Europa durch den Atlantik getrennt worden.)

実際には上記3種の他に、動作受動形の完了形のwordenを単に省略しただけの、動作を受けた後の状態に重点は置いていない状態受動形もあるが、いずれの文法書でも方言的・口語的な、標準語からは逸脱した

² もちろんこの3分類の詳細は研究者によって異なり、例えばZifonun et al.では各形式の名称も順にsein-Passiv, nicht-konverse Zustandsform, allgemeine sein-Konverseとなっている(Zifonun et al.: 1808-1823)。

³ これは動詞によっては多義となる。

Der Spieler ist verletzt.

Der Spieler hat sich verletzt. / X hat den Spieler verletzt.

ものと見なすのが普通である(Helbig/Buscha 175, Duden-Grammatik: 323, Duden-Richtiges Deutsch: 851)。

また、受けた動作そのものよりも、その後の結果の方に重点を置く状態受動形には、原則として動作主を表す語句は入れられない、という主張が必ずしも正しくないことは、すでに Klaus Brinker の研究などにより明らかとなっている (Brinker: 85-89)。

このように、現在までに状態受動形について行われた研究は多方面にわたって多数存在するわけであるが、その具体例の分析対象はほとんどが現在形か過去形で、今回問題としているような状態受動形の完了形の構文意味についてはまったく言及されないのが普通である。記述文法書などで、変化表の一部として機械的に状態受動の完了形、さらには未来形などがあげられることはあるが、そうした形式の活用などが個別に述べられることはまずない⁴。

通常このような場合、その構文の完了形の構文意味は、もっと基本的な別の構文の現在形・過去形・完了形の対応関係を参考にして推して知るべし、ということになる。しかしながら本稿の冒頭で述べたように、状態受動形の完了形に関しては、単純に状態受動形と完了形の構文意味を組み合わせただけでは、受けた動作の「完了後の状態の完了後の状態」という何とも不可解な意味ができあがってしまうので、ネイティブスピーカーでもなければ、きちんと個別に解説がほしいところなのである。

1.2 状態受動形の完了形

幸い、ドイツ語の状態受動形の完了形に関しては、わずかながらこの形式だけを個別に分析した研究が存在する (Litvinov/Nedjalkov: 107-132)⁵。

まず同研究の著者らが述べているように、約 15 年にわたって数百冊以上の文学作品や学問的論述文の本をくまなく探して、約 600 の用例

⁴ 状態受動形に深い関心を寄せる Helbig も、自著の記述文法書では、状態受動形の完了形や未来形はあまり使われることはなく、例えば完了形は過去形で言い換える、と手短かに述べるにとどまっている (Helbig/Buscha: 162)。

⁵ 同書にもいくつか先行研究が挙げられているが筆者は未見。

(使われている動詞の種類は 350) を見つけた (Litvinov/Nedjalkov: 22, 107) ということであるから、いかにドイツ語で状態受動の完了形が稀なのかがわかる。

筆者も本研究のために、手元にある様々なドイツ語の本を 20 冊近くまなく探したが、明らかな用例⁶はわずか 2 例、しかも同一書 (Frisch: 122, 138) に見つけられただけであった。そこで、文脈が捨象されているので分析対象として使うわけにはいかないが、参考までに、紙にして 10 巻本・収録用例数約 9 万という Duden の CD-ROM 版『Das große Wörterbuch der deutschen Sprache』を「gewesen」により全文検索して結果を分析したところ、やはり明らかと思われる用例は 30 にも満たなかった。そこで本研究では、構文意味の分析を行うには筆者自らの用例がまだ少なすぎるので、ドイツ語に関しては Litvinov/Nedjalkov の成果を全面的に参考にすることとしたい。

同書の分析をまとめれば、状態受動形の完了形は、始めに述べたような、受けた動作の「完了後の状態の完了後の状態」という組み合わせで理解されるような構文意味ではなく、この形式ならではの独特の構文意味、つまり「動作を受けた後から続いていたが、観察時には終わっていた状態」を表す、ということである (Litvinov/Nedjalkov: 107)。

⁶ 周知の通り動詞の過去分詞は形容詞として使われることがあるので、一見典型的な状態受動形の用例に見えても、厳密な意味で「動作を受けた後」の状態が含意されているとは考えにくい、つまり前節の a の形式ではなく、c の形式に分類すべきと考えられる場合が多数ある。

Han har været ansat hos mig. (<ansætte?)

Das ist nicht so gedacht gewesen. (<denken?)

このような場合の分類基準については、本稿で取り上げた Brinker や Helbig の諸研究、また最近のものとしては Litvinov/Radëenko: 32-47 などをはじめとして、ドイツ語についての研究は多いが、本研究の範囲を超えると思われるので本稿ではこれ以上深入りはしない。

ちなみに、デンマーク語では述語用法の形容詞にも性数変化があるので、c の形式であることが語形に表れていると考えられる場合もある。ただし、形容詞として使われている過去分詞の性数変化は現代デンマーク語では義務的なものではない。Hansen: 121-122, Diderichsen: 48-49, Rehling: 36-37, Mikkelsen: 420 等を参照。

4. Vielleicht ist es die Tochter, die anruft, wahrscheinlich hat sie es schon vor Tagen versucht, als die Leitung unterbrochen gewesen ist⁷, und jetzt versucht sie es immer wieder. (Frisch: 122)

電話は娘かも知れない。おそらく電話線が断線していた数日前にもかけてこようとして、でまた今も同じことを試している。

ただしこの最後の「観察時に終わっている」は必ずしも客観的なものではなく、話し手がまだ相変わらず続いている状態を主観的に区切って表現する場合も含む (Litvinov/Nedjalkov: 112-116)。

2. デンマーク語の状態受動形の研究

そもそもドイツ語と比べて、デンマーク語に関する研究の絶対数が少ないことは明らかであるが、デンマーク語の状態受動形についての詳細な単独研究もまだないようである。

こうした中、筆者の知る限りでは次の3文献がわずかながら状態受動形の完了形の構文意味に言及している。

まず岡田令子らは、この構文が「過去のある時点で行われた行為の結果、状況等」を示すものとして、

5. Døren har været malet.

この扉はペンキを塗られている。
(けれども今はペンキがはげ落ちている)

6. Døren er blevet malet.

この扉はペンキを塗られた。
(そしてきれいになっている)

と動作受動形の完了形と対比させている (岡田他: 114)。例文に付けられた解釈(「今ははげ落ちている」)を見ると、前述の Litvinov/Nedjalkov の「観察時には終わっていた状態」という分析と共通するものが読みとれる。

次に Aage Hansen は、まず動作受動の完了形と状態受動の現在形を対

⁷ 本稿では、原語による用例と筆者による参考訳の両方で、状態受動形の完了形の

比して、前者が完遂・終了された動作を表し、後者が動作によって引き起こされた状態を示すとしている。その次にこれと同じ対応関係が成り立つ表現として動作受動の完了形と、今度は状態受動の完了形とを対比させ、前者が単に動作がなされたことを表すのに対し、後者は「ある出来事や状態が過去に（時には現在まで）存在していた」ことを表す、と述べて、解釈は付けていないが上記の岡田他と全く同じ例文を挙げている（Hansen: 143-144）。というわけで、ここでもまた「時には現在まで」という但し書きが付くとはいえ、Litvinov/Nedjalkov の分析との共通点が認められる。

最後に Kr. Mikkelsen であるが、状態受動形について述べる際にまず動詞を継続相のものと完結相のものに分けている⁸の目がひく。そしてまず現在形と過去形について、継続相の動詞の場合は変わらない状態を、完結相の動詞の場合は出来た状態を表すものと説明し、それから完了形と続くわけであるが、残念ながらごく簡単に、完了形も現在形と過去形に準じた使われ方をする、とだけ述べているにすぎない（Mikkelsen: 385）。

以上3つの分析の共通点をとると、状態受動の完了形は「（動作を受けた後の）状態が過去に存在していた」ことを表す、ということになる。いずれの研究にも明記されていないが、その動作を受けた後の状態がある程度持続したもの、という暗黙の了解があるとすれば、結局デンマーク語の状態受動の完了形も、ドイツ語の状態受動の完了形と同じく、「動作を受けた後から続いていたが、観察時には終わっていた状態」を表す、ということになりそうである。

しかし、この結論に落ち着いてしまうと、まずデンマーク語とドイツ語で、状態受動の完了形の使用頻度が明らかに違うことの説明がつかない。さらに具体例を見ていくと、「観察時には終わっていた」という但し書きは、いつでも有効とは考えられない、という問題点も出てくるのである。

部分に下線を引く。

⁸ Kr. Mikkelsen の言葉遣いでは、en varighed を表す、または表せる動詞と、en enkelt handling を表す動詞、となっている（Mikkelsen: 384）。

3. デンマーク語の状態受動完了形の分析

ドイツ語では、状態受動完了形がいかに稀かはすでに述べたが、デンマーク語では、頻繁とは言えないが、日常たびたび目にする構文である。その頻度の違いは定量的に調査せずとも明らかである。例えば、筆者は本研究のために、ドイツ語と同じくデンマーク語についても、手元にある 20 冊程度の本から用例を探したが、著者によっては 1 頁に複数、または同一の段落で複数使用している場合もあった。また、ドイツ語では電子辞書を活用しても、9 万の用例からわずか 30 未満しか該当するものを見つけられなかったわけだが、デンマーク語に関しては、もっと規模の小さい電子辞書 (Nudansk ordbog) を使っても 50 前後の用例が見つかり、さらに興味深いのは、この内半数以上が語釈に含まれていた、ということである。いくつか用例を見てみよう。

7. BETYDNING: lade nogen el. noget blive kendt el. synligt som hidtil har været skjult (Nudansk ordbog: »afsløre«)
今まで隠されていた人や物を人目にさらしたり、見えるようにすること (動詞「afsløre」の語義)
8. BETYDNING: (om tøj) som er medtaget fordi det har været vasket mange gange (Nudansk ordbog: »forvasket«)
何度も洗濯されて傷んでいる (形容詞「forvasket」の語義)
9. BETYDNING: som aldrig har været overgået (Nudansk ordbog: »uovertruffen el. uovertruffet«)
負かされたことのない (形容詞「uovertruffen (-et)」の語義)
10. Det her foreliggende udvalg består af fortællinger og skitser som ikke tidligere har været optrykt eller kun har foreligget i forlængst uopdrivelige udgaver. (Klitgaard: 11)
お手元の本作品集は、今まで出版されることがなかった、あるいは入手不可能となって久しいタイトルにしか収録されていない短編や小品から構成されております。

11. Vi må i den forbindelse erindre os, at kirken oprindeligt ikke har været planlagt i den udformning, den har nu. (Kristiansen: 62)
これに関して、この教会の外観は、当初から現在のようなかたちで計画されていたのではない、ということを忘れてはならない。
12. Danmark har ikke altid været så lille, som det er nu, men har været meget større og hersket over andre lande, for lige fra gamle dage har Danmark været styret af konger, som — når de altså var ædru — førte krig mod nogle arvefjender og tog deres land fra dem. (Søeborg: 152)
デンマークは、ずっと現在のように小さかったわけではなく、もっとずっと大きく、他に数か国を従えていたこともあった。デンマークははるか昔から王に統治されてきており、貪欲な王であれば、宿敵達に戦いを挑み、その領土を取り上げる、ということを行ったからである。

以上の用例に、先の「動作を受けた後から続いていたが、観察時には終わっていた状態」という構文意味を照らし合わせてみると、確かに7と10の用例では、観察時（ここでは現在完了なので観察時は現在）にはそれまでの状態が終了していたことは明白である。

しかし、8や11ではどうであろうか。これらの用例での洗濯物や教会には、観察時の前後で何らかの具体的な状態変化は認められないのではないだろうか。もっとも、Litvinov/Nedjalkov の分析に従えば、必ずしも具体的な状態変化は要求されないわけであるが。

さらに、9や12の用例では、未だに誰にも負けていないことや、デンマークが王国であることは、いかなる主観をもってしても変えることはできない不変の事実であり、観察時での状態変化を想定するのは不可能であろう。

このように、人工的ではない、生のデンマーク語の用例を分析すると、デンマーク語の状態受動完了形の構文意味には、ドイツ語の状態受動完了形の構文意味とは違う要素が含まれていることが考えられる。そしてその要素を明らかにすることが、さらにデンマーク語とドイツ語の状態受動完了形の、使用頻度の違いの解明にもつながりそうである。

4. 「継続」用法

ここでもう一度デンマーク語の具体例を見てみると、hidtil「今まで」fra gamle dage「昔から」といった表現が含まれていることが目に付くが、こうした時間表現から思いつくのは、いわゆる英文法での完了形の「継続」用法である。

ここでデンマーク語とドイツ語の完了形の様々な用法について詳述する余裕はないが、デンマーク語とドイツ語では、この「継続」、つまり「過去から観察時まで続いている」ことの表現の仕方がまったく異なることはよく知られている。すなわち、デンマーク語は英語と同じく「継続」を表すには完了形を使い、ドイツ語は現在形・過去形を使う、ということである。

13. Jeg har allerede boet her længe.

Ich wohne hier schon lange.

ここに住んでもう随分経つ。

この「継続意味」を軸に、もう一度デンマーク語の状態受動完了形の用例を見てみると、9 や 12 の用例は何ら問題とならず、さらに 7 や 10 の用例、つまり Litvinov/Nedjalkov に従って「観察時には状態が終了している」としたのも、観察時の直前までは状態が継続していた、と考え直して、同様に「継続意味」としてまとめることが可能となる。

そして、残る 8 や 11 の用例であるが、これはデンマーク語の完了形にもドイツ語の完了形にも（そして英語の完了形にも）共通する、事象発生時点（Ereigniszeit, Aktzeit）を明確にしない過去の事象を表現する用法（ここでは英文法の「経験」用法という名称は採らず、「不定過去」と呼ぶことにする）の例と考えることができよう。

以上をまとめると、デンマーク語の状態受動完了形の構文意味には、ドイツ語の状態受動完了形の「動作を受けた後から続いていたが、観察時には終わっていた状態」という構文意味とは異なり、「過去に受けた動作の結果としての状態が観察時まで継続している」という継続的な意味と、「受けた動作の結果としての状態が観察時より前のある期間存在した」という不定過去の意味の 2 種がある、ということになる。

この考え方が正しいとすると、デンマーク語とドイツ語での状態受動

完了形の使用頻度の違いも、結局は両言語の継続意味の表現の仕方の違いに帰結できることになるわけである。さらに言えば、筆者は自ら行うことができたデンマーク語の用例からは、同じ継続意味でも、デンマーク語には「観察時で終わっている」含みを想定する必要がないのでは、という印象を受けた。この点については、非常に主観的な判断が入ってしまい、また原文の相当な解釈能力も要求されるので、はっきり言い切ってしまうことはできないが、そうだとすると、ドイツ語の状態受動完了形は、もともと継続意味の表現には使われず、不定過去を表現する場合でも、観察時には状態が（主観的な場合も含めて）取り消されているなければならないという、非常に制限の多い構文であることになる。

5. まとめ

本研究では、デンマーク語とドイツ語の状態受動完了形の構文意味を探り、どちらも動作を受けた後に結果として残る状態を表現するが、デンマーク語では、その状態が依然として続いていることと、かつて続いていたことがあることの両方を表せること、ドイツ語では後者のみを表すことが明らかとなった。

今後の課題であるが、用例を充実させることはもちろんであるが、そもそも状態受動形、あるいは受動表現全般、さらには完了形についても広汎な分析を行って参照することが必要であろう。また、デンマーク語で状態受動完了形を使って表されている継続意味が、実際にドイツ語では状態受動現在形で表されていることの確認作業も必要であろう。

出典

- [Duden =] Der wissenschaftliche Rat der Dudenredaktion (red.) 2000: DUDEN — Das große Wörterbuch der deutschen Sprache. 10 Bände auf CD-ROM. Version 2.01. Mannheim: Bibliographisches Institut & F. A. Brockhaus.
- Frisch, Max 1981: Der Mensch erscheint im Holozän. (= suhrkamp taschenbuch 734). Frankfurt a. M.: Suhrkamp.
- Klitgaard, Mogens 1989: Hverdagens musik. Udvalgte noveller og skitser.

Fremad.

Kristiansen, Kristian 1990: *Mystikkens Danmark. 100 mærkelige og mystiske steder i Danmark.* Forlaget Danmark.

[Nudansk ordbog =] 1997: *Politikens store nye nudansk ordbog på cd-rom. Version 2.1.* Politikens Forlag.

Søeborg, Finn 1968: *Alfred og andre historier.* København: Rasmus Navers Forlag.

文献

岡田令子・菅原邦城・間瀬英夫『現代デンマーク語入門』東京・大学書林、1984年。

亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典 第6巻 術語編』東京・三省堂、1996年。

川島淳夫編『ドイツ言語学辞典』東京・紀伊國屋書店、1994年。

新谷俊裕「現代デンマーク語の s-passiv と blive-passiv の用法について」『IDUN』第9号、65～92頁、1990年。

新谷俊裕「デンマーク語における受動態の頻度 文学作品等における受動態頻度数の算出方法」『IDUN』第10号、101～120頁、1992年。

Brinker, Klaus 1971: *Das Passiv im heutigen Deutsch. Form und Funktion.* (= *Heutiges Deutsch I/2*). München: Max Hueber Verlag.

C.R.L.G. 1987: »Transformativität und Intransformativität zur Interpretation deutscher Passivsätze«. C.R.L.G. (red.), s. 235-255.

C.R.L.G. (= Centre de Recherche en Linguistique Germanique) (red.) 1987: *Das Passiv im Deutschen. Akten des Kolloquiums über das Passiv im Deutschen, Nizza 1986.* (= *Linguistische Arbeiten 183*). Tübingen: Max Niemeyer.

Diderichsen, Paul 1946: *Elementær dansk grammatik.* København: Gyldendalske Boghandel - Nordisk Forlag.

[Duden-Grammatik =] Drosdowski, Günther (red.) 1995⁵: *Die Grammatik. Unentbehrlich für richtiges Deutsch.* (= *Der Duden Bd. 4*). Mannheim: Dudenverlag.

- [Duden-Richtiges Deutsch =] Der wissenschaftliche Rat der Dudenredaktion (red.) 1997⁴: Richtiges und gutes Deutsch. Wörterbuch der sprachlichen Zweifelsfälle. (= Der Duden Bd. 9). Mannheim: Dudenverlag.
- Haberland, Hartmut 1996: »Semantik oder Pragmatik der Tempora?«. Thieroff, Rolf et al. (red.) Tempus im Deutschen und anderen Sprachen. Vorträge vom Tempusseminar in Roskilde am 5. Januar 1996 (= ROLIG-papir 58), s. 54-66.
- Hansen, Aage 1967: Moderne dansk. Grafisk Forlag.
- Helbig, Gerhard 1983a: »Zustandspassiv, *sein*-Passiv oder Stativ?«. Studien zur deutschen Syntax 1. Leipzig: VEB Verlag Enzyklopädie, s. 47-57.
- Helbig, Gerhard 1983b: »Zu den zustandsbezeichnenden Konstruktionen mit *sein* und *haben* im Deutschen«. Studien zur deutschen Syntax 1. Leipzig: VEB Verlag Enzyklopädie, s. 58-66.
- Helbig, Gerhard 1987: »Zur Klassifizierung der Konstruktionen mit *sein* + Partizip II (Was ist ein Zustandspassiv?)«. C.R.L.G. (red.), s. 215-233.
- Helbig, Gerhard / Buscha, Joachim 1991¹⁴: Deutsche Grammatik. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht. Berlin: Langenscheidt · Verlag Enzyklopädie.
- Hermanns, Fritz 1987: »Ist das Zustandspassiv ein Passiv? Versuch, einer terminologischen Ungereimtheit auf die Spur zu kommen«. C.R.L.G. (red.), s. 181-213.
- Holmes, Philip / Hinchliffe, Ian 1994: Swedish. A comprehensive grammar. London: Routledge.
- Litvinov, Viktor P. / Nedjalkov, Vladimir P. 1988: Resultativkonstruktionen im Deutschen. (= Studien zur deutschen Grammatik 34). Tübingen: Gunter Narr.
- Litvinov, Viktor P. / Radëenko, Vladimir I. 1998: Doppelte Perfektbildungen in der deutschen Literatursprache. (= Studien zur deutschen Grammatik 55). Tübingen: Stauffenburg.
- Mikkelsen, Kr. 1911: Dansk ordføjningslære. Med sproghistoriske tillæg. Håndbog for viderekomne og lærere. København: Lehmann & Stages Forlag.

- Næs, Olav 1965²: Norsk grammatik. Elementære strukturer og syntaks. Oslo: Fabritius & Sønners Forlag.
- Rehling, Erik 1951³: Det danske sprog. København: J. H. Schultz Forlag.
- Zifonun, Gisela / Hoffmann, Ludger / Strecker, Bruno 1997: Grammatik der deutschen Sprache. (=Schriften des Instituts für deutschen Sprache 7.3). Berlin: Walter de Gruyter.
- Åfarli, Tor A. 1992: The syntax of Norwegian passive constructions. (=Linguistik aktuell 7). Amsterdam: John Benjamins Publishing.